

〔論 文〕

## 医療系専門学校における教学 IR データに基づく 退学者の傾向分析

長吉 美弥子\*, 吉村 充功\*<sup>2</sup>

\*日本文理大学保健医療学部保健医療学科

\*<sup>2</sup>日本文理大学工学部建築学科

### Trend Analysis of Dropout Students Based on Academic IR Data at Medical College

Miyako NAGAYOSHI\*, Mitsunori YOSHIMURA\*<sup>2</sup>

\*Department of Health Sciences, School of Health Sciences, Nippon Bunri University

\*<sup>2</sup>Department of Architecture, School of Engineering, Nippon Bunri University

#### Abstract

In recent years, the era of admission for all has arrived in universities, and the number of dropouts has increased due to poor grades following the admission of students who have not yet established their academic ability. Professional training colleges face a similar predicament, and measures to reduce dropout students are necessary. However, there is very little research on dropout students at professional training colleges. This study conducts simple tabulation and cross-tabulation analysis of sex and dropout time using academic IR data at a medical college, surveys the trend of dropout students, and clarifies the actual situation of dropout students. Results show that (1) the dropout rate of male students is about 1.5 times higher than that of female students; (2) most students drop out between January and March of the first year—dropout students in the first year accounted for more than half of the total; and (3) the high school evaluation of those enrolled via recommendation by a designated school was the highest among the enrolment categories of the dropout students.

キーワード：専門学校、教学 IR、中途退学、退学要因

**Keywords** : professional training college, institutional research, dropout students, dropout factors

#### 1. はじめに

近年、日本における大学進学率は一貫して右肩上がり  
で、大学進学者数も増加傾向であった。しかしながら、

18歳人口は1992年をピークに減少し続けているため、大  
学進学率は上昇しても大学進学者数は減少局面に突入す  
ると推計されている<sup>(1)</sup>。実際、2022年度の学校基本調  
査によると、大学進学率は56.6%、大学入学者数は  
635,156人と過去最高であったが、大学入学者数は前年

の2021年度は627,040人で、直近5年の中で最低を記録しており、頭打ちの様相である<sup>(2)</sup>。大学志願者数が大学入学定員を下回る、いわゆる“大学全入時代”に早晚突入すると考えられる。

文部科学省が2012年度に国・公・私立大学、公・私立短期大学、高等専門学校を対象に調査したところ、2.65%にあたる79,311人が中途退学しており、中途退学者の14.5%にあたる11,503人が学力不振を理由に挙げている<sup>(3)</sup>。その後の文部科学省大学改革推進委託事業での調査では、中途退学率は2.12%とやや低減しているが、学業不振による退学者の割合は国立13.5%、公立12.3%、私立18.4%と依然として高い割合を占めている<sup>(4)</sup>。大河内らの研究によると、「特に初年次春学期の成績不振者がその後、成績の回復が困難となる傾向が高い」と述べている。そのため、退学を予防するための実態調査と早期の対策が重要とされている<sup>(5)</sup>。

高等教育機関における中途退学の現状や要因等に関する研究は、大学や短大を対象としたものが多く報告されており、多くの知見が得られている。本研究の対象である保健医療系分野についても、大学や短大については同様の知見が得られている。一方、高等教育の一翼を担う専修学校においても進学率は上昇傾向にあり、学校基本調査によると2020、2021年度はいずれも24.0%と過去最高を記録したが、2022年度は22.5%と若干低下し、入学者数の減少が始まっている<sup>(2)</sup>。これは大学・短大が直面しているのと同様に専修学校においても経営面で深刻な問題として対策が急務となる。また、今後さらに深刻化する高齢化社会に必要な医療従事者を育成し輩出するという面においても、医療系養成校としての責任がなお一層重くなると考えられる。その対策の1つとして「中途退学者の減少」が必要である。しかし専修学校、とりわけ医療系専門学校における退学者についての研究は非常に少なく、先行研究がほとんど存在しないのが現状である。一方で豊富な知見が存在する大学生への調査による知見を専門学生への対策としてそのまま受け入れていいのかという疑問が残る。大学と専門学校の中途退学の傾向や対策の違いを明らかにすることが望まれるが、まずは専門学校における中途退学の実態やその要因を明らかにすることが重要である。

## 2. 本研究の目的

本研究では、医療系専門学校における中途退学の実態を明らかにすることを目的とし、早期中退予防につながる足がかりを得ることとする。中退予防につながる際

に、学校が保有する教学IR (Institutional Research) データに基づいて要因が特定できれば、比較的容易に組織的な対応が可能となる可能性が高い。そこで本研究では、教学IR データを用いた統計分析に主眼を置くこととする。具体的には、退学傾向を示す学生の中でもまず入学時からのスタートダッシュの躓き、各年次の成績低迷などから、ドロップアウトする学生の早期洗い出しができれば、学生が退学の意思を固める前に適切なタイミングで効果的なサポートを実施することができると考えている。

## 3. 既往研究

### 3-1 学生の退学の実態および要因についての既往研究

田原らは、長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科の開設から10年間の学生身分異動について検討している。全入学者の退学率は2.6%で、男子が女子の約2倍高く、学年が進むにつれて減少の傾向を示したと報告している<sup>(6)</sup>。上野らは北大医技短部作業療法学科で退学率が高率である理由として、看護や理学は医療職としての歴史が古く、社会的にも広く認知されているので総じて退学率が低い、作業ではその点が不十分であることを指摘している。進路変更を理由にした退学が6割を占め、初年次の1～2年間に退学を決め、3年次では実習に関連した心身の体調不良が見られる傾向があるとしている<sup>(7)</sup>。牧野は、大学生の不登校について論じており、不登校傾向の学生の半数以上が無気力や無力感を感じている。退学理由としてこの無力感を上げるのは男子の方が女子に比べて高く、不本意入学が原因ではないかと予想している<sup>(8)</sup>。鍛冶は、「サークル活動に参加し、初年次前期で単位をたくさん取ることのそれぞれが、退学防止にも留年防止にも顕著な効果を上げている」ということが得られた最大の知見としている<sup>(9)</sup>。荒井らは、教員から見た大学生の不登校リスク要因同定について述べている。大学生の不登校問題について、昨今の不登校学生はひきこもりの強いタイプが多く、学生の自主性や自律性を尊重する関わりではもはや立ち行かなくなっている。不登校の日数が多いほど取得単位数が少なく、留年のリスクが高まることも実証されていることから、できるかぎり早期発見と積極的な支援が必要であるとしている<sup>(10)</sup>。松高は、大学生の不登校に関する要因の検討についての報告を行っており、学生支援に寄与する目的で大学教員を対象とした調査を行った。具体的には、①不登校学生と教員との関わりの状況、②不登校学生が抱え

る背景と不登校の開始時期との関連性、③不登校学生の転帰と関連のある要因はどのようなものか、の検討をしている。教員・大学からの連絡に反応しない学生の支援が困難であること、不本意入学が1年次の不登校につながりやすいこと、また、学習意欲の低下という背景をもつ場合には、2年生よりも1年生および3年生に不登校が始まる傾向のあることを見出している<sup>(11)</sup>。

### 3-2 学生の学校への適応性についての既往研究

正村らは、臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因について報告している。臨床実習中の看護学生のストレス認知の程度をアンケート調査にて実施し、その結果、①臨床実習中の学生は「実習記録を書くのに時間外の多くの時間を要すること」や「看護師との関係」に非常に強い、または適応できないほどのストレスを感じている、②「家族と同居」している学生の方が「一人で生活」している学生よりも「知識・技術の準備不足」面でのストレスが低い傾向が認められた、③「他者との交流の多い」学生の方が「交流の少ない」学生よりも「知識・技術の準備不足」面でのストレスが有意に低かった、ことが知見として得られている。そして学生が認知しているストレスを軽減するための方法として、①学生の負担を考慮した簡潔で有効な実習記録を作成し、記録の時間を実習時間内に確保すること、②指導者は学生を一人の人間として尊重した関わりをすること、③学生相互の交流を促進する対策をとることが重要であると述べている<sup>(12)</sup>。

### 3-3 学生の学力と内的側面についての既往研究

近藤らは、プレースメントテストの結果に見られるゆとり教育世代学生の数学基礎学力について報告している。高校までに身につけた基礎学力の差が、大学での単位取得可能性に与える影響は小さいが、基礎学力に不安のある学生が高得点で単位を取得しようとする入学後に相当量の学習が必要であることを示唆している。大学での教育効果を高めるには学生間での「知識の深さ」を揃えることが重要になると結論づけている<sup>(13)</sup>。大河内らは、数学プレースメントテストを利用することで、初年次に成績不振となる学生を50%程までに絞り込めることが判り、さらに初年次に退学者・休学者・留年者などの未進級となる学生の早期発見に利用できることも明らかにしている。一方、高校での履修状況や入学試験の結果と数学プレースメントテストの間には明確な関係が見られず、それらを用いた初年次未進級学生の絞り込みも困難であることも判ったとしている<sup>(5)</sup>。竹橋らは

GPAと欠席率による退学者予測の有用性について検討した。その結果、退学者予測では累積GPAの影響が大きかった。また欠席率が高いほど学期GPAが悪化し、退学リスクが高まるという間接的な影響の可能性が示唆された<sup>(14)</sup>。高橋らは、琉球大学学士課程における退学・休学・除籍・留年の早期発見について報告している。退学等に至る学生の特徴の可視化を試みた結果、①退学等に至った学生の初年次前期のGPAは卒業した学生よりも低いこと、②除籍と留年に至った学生には不本意入学者が多い一方で、卒業した学生には不本意入学者は少ないこと、③不本意入学者は本意入学者よりも初年次前期のGPAが低い、という学生の特徴が可視化されたとしている<sup>(15)</sup>。

### 3-4 本研究の位置付け

早期中退予防を考える上で重要となる「退学の実態および要因」、「学校への適応性」、「学力と内的側面」の3つの観点から既往研究を概観してきた。以下3つの観点で調査した先行研究について整理する。

第1に、退学率の実態は専門学校を対象とした研究が少なく、医療技術職の中でも臨床検査学科の学生を対象としたものはほとんどないといってよい。大学生を対象とした研究においても、「全国の大学を対象としたもの」「特定の大学を対象としたもの」など調査方法にもバラツキがあるが、入学年度の退学者が最も多い傾向にある。第2に、学校への適応性を対象とした退学に至る原因の分析については、学生自身の問題（成績不振、意欲低下、不本意入学など）や、環境（経済的困窮、学生と教員の関係など）、またそれらが複合的に関係するなど多様である。第3に、学力と内的側面の調査データに基づき退学傾向にある学生の発見に役立つ教学IRデータとしては、プレースメントテスト、GPA、クレペリン検査に知見が得られている。

本研究では、医療系専門学校臨床検査学科の退学率について調査し、入学年度の退学者が既往研究と同様に最も多くなっているのか、さらに得られる知見を整理する。医療系の養成校では臨地実習での緊張、ストレスなども大きい。そのストレスの感じ方や解消能力も個人差があるであろう。それが、退学を思いとどまらせる者と退学を決断する者を分ける要因の一つであるかもしれない。退学の原因を知ることは学生個人に合った支援を提供できることに他ならない。

以上の通り、専修学校、とりわけ医療系専門学校における退学実態および要因の解明を行うことが本研究の第一の特徴である。これらが既往の大学・短大を対象とし

た結果と相違があるかどうかを解明することが第二の特徴である。

#### 4 教学 IR データの集計による退学者の傾向分析

##### 4-1 調査対象者および対象 IR データ

医療系専門学校における中途退学の実態を明らかにするため、本研究では、X 医療系専門学校臨床検査学科の開設年度である2005年度から2020年度までの入学生513人（男性179人、女性334人）を対象とする。

これらの対象者について、X 医療系専門学校保管の高校評定、欠席日数、TELES 基準テスト、初年次前期学期試験により算出した学期 f-GPA、クレバリン検査などの教学 IR (Institutional Research) データを匿名化した上で、検討対象とする。

なお、教学 IR とは、教学組織で集められたこれらの各種データを一元的にデータ管理、分析することで、教育プログラム改善や大学経営戦略計画の策定等に活用する取り組みを指す言葉である。

##### 4-2 分析方法

本研究では、前節に示した X 医療系専門学校（以下、X 校）保管の退学者に関する基本情報を用いて、単純集計および男女別、退学時期等に着目したクロス集計を中心に分析する。

##### 4-3 性別に着目した退学者の傾向

本節では、退学の傾向について性別に着目して分析を行う。

分析の前に、X 校臨床検査学科の2005年度から2020年度の年度別入学者数を見てみると、開学の2005年度のみ男子学生の割合が女子学生の割合を超えているがそれ以降は女子の割合の方が多い（図1）。

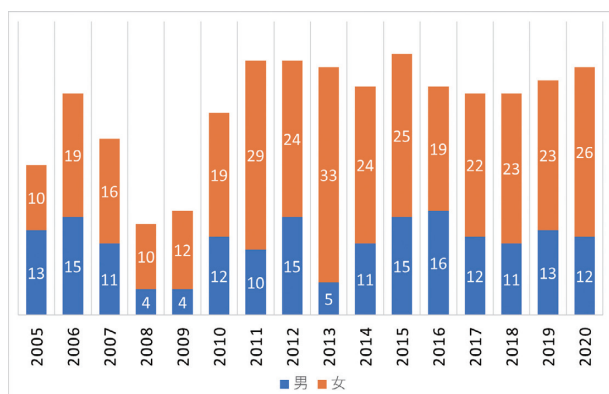


図1. 入学年度別男女別入学者数

X 校では、2005年4月に臨床検査学科が開設され（入学定員40人）、入学者数は2007年の3学年がそろったところで収容定員充足率が70%である。2008年、2009年度は入学者数が減少しているが、2010年度から入学者数は増加し、ほぼ入学定員を充足する状況で安定している。これは当初入試制度が年度ごとに改変していることや、卒業生を輩出したことによる国家試験合格率などの影響が考えられる。

次に退学者の数、退学率、男女比をみる。入学年度別退学者数は、開設2年目の入学生にあたる2006年度が最も多い（図2）。また、2013年度入学生以降の退学者は減少傾向にある。2005年度から2020年度の合計退学者数は118人、男女比は44:56である（図3）。入学者は男女比が35:65であることから、男子の方がより退学につながっている傾向が見て取れる。

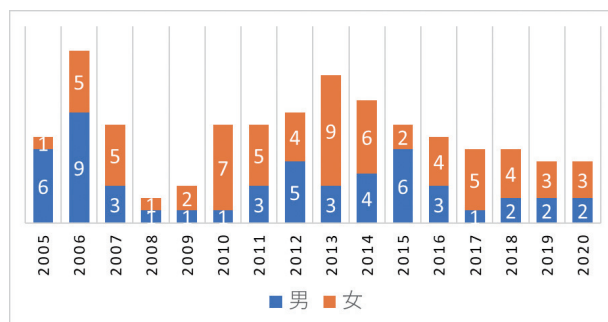


図2. 入学年度別男女別退学者数

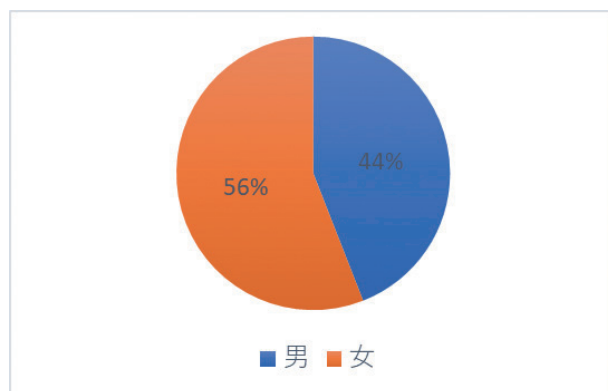


図3. 退学者男女比

入学年度別男女別の退学率を分析する。ここで、各入学年度の男子入学者に占める男子退学者の割合を「男/男」退学率（以下、男/男退学率）とし、各入学年度の女子入学者に占める女子退学者の割合を「女/女」退学率（以下、女/女退学率）とする。

2005年度の男/男退学率は46.2%、女/女退学率は10.0%と、男子学生の退学率が女子の4倍以上である

(図4)。その後も2006年度の男/男退学率は60.0%、女/女退学率は26.3%で2倍以上の差で男子学生の退学率が高い。2020年度までの総退学率は減少してきているが、全体では男/男退学率が29.1%、女/女退学率が19.8%と男子の退学率が高い。

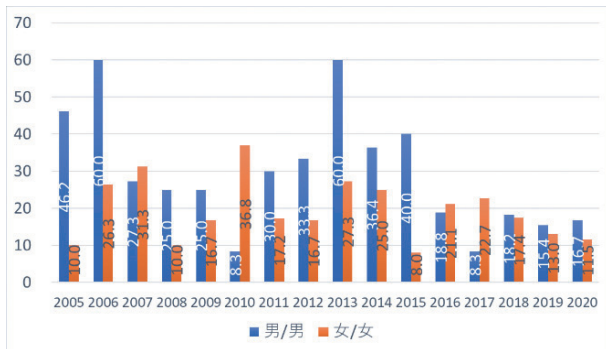


図4. 入学年度別男女別退学率

他の医療系養成校で性別と退学率との関係を調査した既往研究をみても、田原らは長崎大学医療技術短期大学部で10年間の学生異動の実態を調査し、入学者の退学率は男子が女子の1.5倍高く、学年が進行するほど低くなる傾向であると述べている<sup>(6)</sup>。X校でも同様に男子学生の退学傾向が女子学生より高い傾向がうかがえたが、有意差は認められなかった。

4-4 退学理由に着目した退学者の傾向

次に退学理由に着目すると、全体では「学業不振」が43人(36.4%)、「進路変更」が51人(43.2%)、「体調不良」が19人(16.1%)、「意欲喪失」が3人(2.5%)、「経済的理由」が1人(0.8%)、「不明(一身上の都合)」が1人(0.8%)であり、「進路変更」が最も多い(図5)。入学年度別男女別に退学理由別の退学者数を集計し分析したが、明確な特徴は見られなかった(図6)。

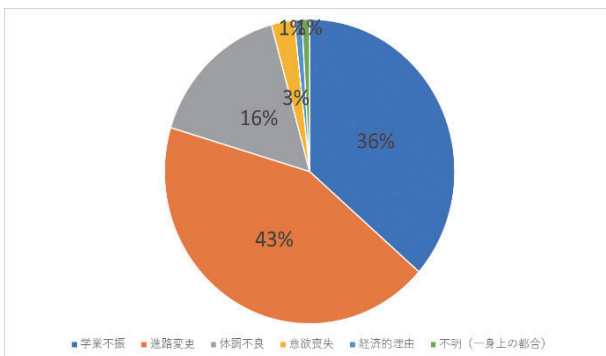


図5. 退学者の退学理由の内訳

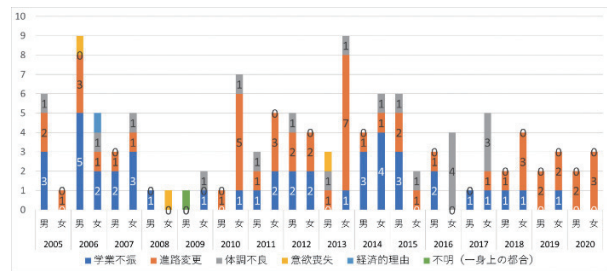


図6. 入学年度別男女別退学理由別退学者数

なお、退学理由について、臨床検査技師という仕事に興味がなく周囲の勧めなどで入学してきたミスマッチ入学や、成績不振や学校生活に馴染めないなどの原因から就職や他業種の学校への再入学など、成績不振からの進路変更ととらえられる複合的な理由も考えられるが、ここでは単一の理由で整理している。

4-5 退学時期に着目した退学者の傾向

退学時期について、前述の田原は、退学は学年進行とともに低くなる傾向があると述べている<sup>(6)</sup>。また窪内は、一般に最も早期に新入生の状況がわかるのは、単位の登録完了、授業の欠席状況、1年前期の成績状況の3つで何らかのつまづきが判明し、その援助により退学・休学のかかなりの部分をくいとめることができると述べている<sup>(16)</sup>。

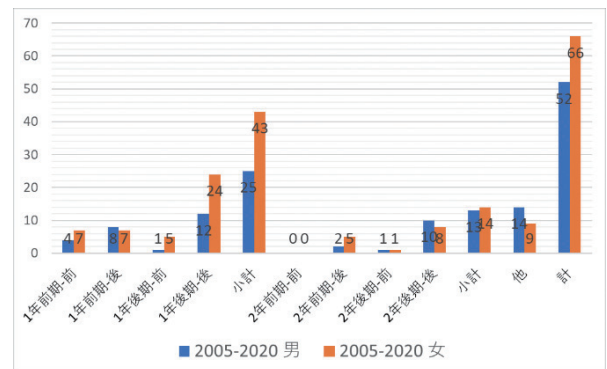


図7. 退学時期別男女別退学者数

そこで、X校での退学者の退学時期をクォータ毎に切り分け、男女別に集計した(図7)。1年次4月~6月の退学を「1年前期-前」、1年次7月~9月の退学を「1年前期-後」、1年次10月~12月の退学を「1年後期-前」、1年次1月~3月の退学を「1年後期-後」、2年次4月~6月の退学を「2年前期-前」、2年次7月~9月の退学を「2年前期-後」、2年次10月~12月の退学を「2年後期-前」、2年次1月~3月の退学を「2年後期-後」とし、3年次以降の退学と、留年後退

学したものを「他」とした。

男女合計では、1年生の年度末（1年後期－後）に退学する学生が36人で最も多く、全体の30.5%を占める。次いで3年次になってから、または留年中を示す「他」が23人で19.5%、さらに2年後期－後が18人で15.3%と続く。1年生で退学する学生が全体の57.6%と、半数以上が初年次にドロップアウトしている。

男女別では、1年次では、男子学生は退学時期に2つのピークがみられる。1年前期－後、つまり前期期末試験の結果が出る時期に8人が退学している。次に1年後期－後、つまり通年科目の成績も出そろい、在退学を決める時期に12人が退学を決めており、1年次に退学する男子学生の48.0%を占める。それに対し女子学生は、1年前期－前というまだ入学間もない時期に退学を決意する者が7人、1年前期－後が7人と同数いることがわかる。そして1年後期－後に24人となっており、1年次に退学する女子学生の55.8%が1年次終了時に退学している。1年次に退学した男女計68人中、女子学生が43人、男子学生が25人で、退学者数は女子学生のほうが多い。

また、学年全体に対する1年次に退学する者の割合は、男子48.1%、女子65.2%と女子の割合が高くなっている。これは、特に女子学生は「退学する」と考え始める時期が男子学生より早期傾向か、その傾向を分析する必要がある。傾向がわかることで、対応策をとることができると考えられる。

2年次について、1年次よりも退学者数は低下している。これは2年次では学習する内容の専門性がより深くなることで、1年次よりも医療職としての業務内容をよりイメージしやすくなること、また3年という就学期間の半ばまで来たことで「もう辞められない」、「ここまで頑張ってきたのだから国家試験に合格したい」、などの気持ちが強くなり、またクラス内で協力しあえる仲間意識が高まることも学修意欲の継続につながっているのではないかと予想される。一方、2年次後期－後に退学する者も男子学生が10人、女子学生が8人と一定数存在する。この2年次以降に退学する層と1年次に退学する層を比較分析し、各層における退学要因の特徴を確認する必要がある。

また、「他」で表記しているのは、3年次の退学や留年中、休学中の退学を表す。X校では開学当初と現在の学費や留年制度に変更点があり、学生の在籍期間が一定しないため、分類上「他」としているが、この時期の退学の原因について初年次の対策、支援により解決が期待できるのであれば、この原因も掘り下げていく必要がある。

次に退学時期と退学理由についてのクロス集計を表1に示した。学生の退学理由は「学業不振」「進路変更」「体調不良」に集中しているが、退学時期をみると、退学を考える学生は1年生の1～3月（1年後期－後）の間に「進路変更」として退学を決断する者が24人と突出している。

表1. 退学時期別退学理由別男女別退学者数

	学業不振		進路変更		体調不良		意欲喪失		経済的理由		不明	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1年前期-前	2	4	1	2	1	0	0	1	0	0	0	0
1年前期-後	5	2	1	1	2	4	0	0	0	0	0	0
1年後期-前	1	2	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0
1年後期-後	4	6	8	16	0	1	0	0	0	1	0	0
2年前期-前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2年前期-後	1	1	1	3	0	1	0	0	0	0	0	0
2年後期-前	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
2年後期-後	3	2	5	4	0	2	1	0	0	0	1	0
他	8	2	3	3	2	4	1	0	0	0	0	0
総計	24	19	20	31	5	14	2	1	0	1	1	0

本研究の調査では、この退学理由の分類は、退学時に提出された退学届の記載に基づいている。「退学理由」は学生、担任それぞれが記載する欄がある。中には学生「進路変更」、担任「成績不振による進路変更」といった相違がみられたが、この場合は成績不振がなければ退学に至らなかった可能性が高いと考え「学業不振」に分類した。

「学業不振」による退学は、1年次に満遍なく存在しており、1年次の学業支援は退学防止の面から重要であると考えられる。

「体調不良」を退学理由とする者は時期に寄らずそれぞれ一定数存在するが、1年前期－後の女子は4人と他の時期より多くなっている。内訳は身体的な持病によるものが1件で、ほかは精神的な不調が占めている。原因は「学校の勉強が思ったより難しく不安」、「友人関係がうまくいかない」、「地元に戻りたい（県外生）」などであるが、成績に起因する精神的な不安がある場合、特に女子学生は入学直後から退学を考える学生が一定数いるということであれば、その不安を和らげる対策を講じていくことは可能ではないかと考える。

#### 4-6 受験区分に着目した退学者の傾向

次に、受験区分に着目した退学者の傾向を分析する。近年のAO入試など、特技を活かした受験制度の導入により非学力型入試により入学してくる学生の学力の低下傾向が問題になっている。しかし、石井によれば、推薦入学生と一般入学生の成績分布の位置はほぼ同等で、推薦入学生の学力が低いとは言えないと述べている<sup>(17)</sup>。学修効果の観点で非学力型入試の学生と学力型入試の学生の比較を試みた数多くの研究は、一概に非学力型の学

生の成果が劣るとは結論づけられていない。そこで本研究でも同様の知見が得られるのか、受験区分毎の退学時期、退学理由について、それぞれクロス集計で検討する。

表2より、指定校推薦38人、高校推薦40人、一般入試40人、と入試区分別の退学者数はほぼ同じで、退学時期についても大きな差がみられない。

表2. 受験区分別男女別退学時期別退学者数

受験区分 性別	指定校推薦		高校推薦		一般		計
	男	女	男	女	男	女	
1年前期-前	1	3	1	3	2	1	11
1年前期-後	0	3	2	1	6	3	15
1年後期-前	0	0	1	3	0	2	6
1年後期-後	4	11	5	9	3	4	36
2年前期-前	0	0	0	0	0	0	0
2年前期-後	1	0	0	1	1	4	7
2年後期-前	0	1	1	0	0	0	2
2年後期-後	7	5	2	2	1	1	18
他	1	1	7	2	6	6	23
計	14	24	19	21	19	21	118
総計	38		40		40		118

また、表3から、入試区分による退学理由にそれほど特徴的な関係は見いだせない。

ここで入学時に学力の差がすでについているのか、退学者の高校評定の平均を算出してみると、「指定校推薦」で3.97、「高校推薦」で3.79、「一般入試」で3.81と、指定校推薦の学生の高校評定の平均が最も高いことがわかった。高校評定は各校のバラツキが大きい、松崎らの「早期に入学が決まる者ほど学業適応、学校生活適応感が高くなる」という報告と矛盾しない結果である<sup>(18)</sup>。将来の進路を臨床検査技師に定め、養成校に入学を決めた学生は入試までに必要な学修に励むことで高校評定が高くなると考えられる。

表3. 受験区分別男女別退学理由別退学者数

受験区分 性別	指定校推薦		高校推薦		一般		計
	男	女	男	女	男	女	
学業不振	6	7	10	6	8	6	43
進路変更	5	11	8	10	7	10	51
体調不良	1	6	0	3	4	5	19
意欲喪失	1	0	1	1	0	0	3
経済的理由	0	0	0	1	0	0	1
不明	1	0	0	0	0	0	1
計	14	24	19	21	19	21	118
総計	38		40		40		118

#### 4-7 退学者の傾向についてのまとめ

ここまで単純集計、クロス集計によるX校臨床検査学科入学生の退学者の実態をみてきたが、まとめると、「調査対象期間の退学率は減少傾向である」、「男子学生

の退学率が女子学生の退学率の約1.5倍である」、「退学時期は1年後期1月から3月が最も多く、初年次の退学者が全体の半分以上の57.6%を占める」、「退学理由は進路変更が最も多い」、「退学者の受験区分別では指定校推薦での入学者の高校評定が最も高い」ということがわかった。

これまでの先行研究でも退学者を減らすべくその実態を調査したもの、その退学傾向となる要因、早期発見するための因子などの検討が多くみられる。しかしX校のような医療系専門学校での調査は少ない。これは、たとえば大学での退学傾向をみる因子として、先述した履修登録や欠席状況などが上げられるが、専門学校は学生全員が決められた科目を毎週同じ時間割で受講していくため履修登録をする必要がない上、欠席が続く前に担任から何か問題を抱えているのかを本人、時には保護者にも連絡し面談を重ねていくため欠席日数での比較もほとんど意味を持たない。しかしながら、本医療系専門学校を対象とした結果は、大学・短大のそれと大きな差がないことが明らかとなった。

## 5 結語

本研究では、医療系専門学校を対象に教学 IR データを活用した退学者の状況分析を行い、「入学初年次の退学者が最も多く、退学率は男子学生のほうが女子学生よりも多い」という大学・短大対象の調査結果と矛盾しない結果が得られた。

X校で得られるその他の教学 IR データとしては、高校での欠席日数、X校入学後の TELES 基準テスト、学期 f-GPA、クレペリン検査などが使用可能である。今後はこれらの教学 IR データを用いて退学の要因解明に迫り、退学者の減少につながる効果的な対策に役立てることが期待される。

なお、本研究において対象となる教学 IR データは無記名化し、集合データとして解析に用いている。また記憶媒体は一元化し厳重に管理し、研究終了後は速やかに紙媒体のデータの破棄などを行い、情報流出を防止するという配慮のもと、日本文理大学医療専門学校倫理審査委員会での承認を得ている（承認番号：04-004）。

## 参考文献

- (1) 中央教育審議会大学分科会将来構想部会 2018 「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」

- (2) 文部科学省「学校基本調査」,  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm) (2023年6月13日確認)
- (3) 文部科学省 2014「学生の中途退学や休学等の状況について」
- (4) 白川優治・大島真夫・黄文哲 2016「大学における授業料滞納・中途退学・休学の状況－大学調査の結果から」『平成27年度文部科学省大学改革推進委託事業，経済的理由による学生等の中途退学の状況に関する実態把握・分析等及び学生等に対する経済的支援の在り方に関する調査研究』，第4章，175-210.
- (5) 大河内佳浩・山中明生 2016「プレースメントテストや高校の履修状況などのデータを用いた初年時成績不振者の早期発見」『日本教育工学会論文誌』，40（1），45-55.
- (6) 田原弘幸・井口茂・鶴崎俊哉・沖田実・中野裕之・千住秀明・穂山富太郎・加藤克知・松坂誠應 1995「長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科における学生異動の実態－開設以来10年間の退学・休学・留年を中心に－」『長崎大学医療技術短期大学部紀要』，9，15-21.
- (7) 上野武治・深澤孝克・真木誠・大宮司信・末永義圓・丸谷隆明・村田和香・河野仁志・吉田直樹・八田達夫 1994「北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科における学生異動の実態：開設以来10年間の入学者の留年・休学・退学を中心に」『北海道大学医療技術短期大学部紀要』，7，61-71.
- (8) 牧野幸志 2001「大学生の不登校に関する基礎的研究（1）－大学生の不登校と退学希望の理由の探索－」『高松大学紀要』，36，79-91.
- (9) 鍛冶致 2010「新設大学における退学・休学・留年－多変量解析による要因分析－」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』，62，392-393.
- (10) 荒井佐和子・石田弓・大塚泰正・岡本祐子・兒玉憲一 2013「教員からみた大学生の不登校リスク要因の同定」『広島大学心理学研究』，12，93-101.
- (11) 松高由佳 2016「大学生の不登校に関する要因の検討」『広島文教女子大学心理臨床研究』，7，1-8.
- (12) 正村啓子・岩本美江子・市原清志・東玲子・藤澤怜子・杉山真一・國次一郎・奥田昌之・芳原達也 2003「臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因の検討」『山口医学』，52（1・2合併号），13-21.
- (13) 近藤康雄・中村肖三 2008「プレースメントテストの結果に見られるゆとり教育世代学生の数学基礎学力」『工学教育』，56（4），94-97.
- (14) 竹橋洋毅・藤田敦・杉本雅彦・藤本昌樹・近藤俊明 2016「退学者予測におけるGPAと欠席率の貢献度」『大学評価とIR』，5，28-35.
- (15) 高橋望・藤本裕介・西本裕輝 2019「琉球大学学士課程における退学・休学・除籍・留年の早期発見に向けた検討：退学等に至る学生の初年次前期のGPAと入学動機の特徴の可視化の試み」『琉球大学大学教育センター報』，21，89-100.
- (16) 窪内節子 2009「大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方」『山梨英和大学紀要』，8，9-17.
- (17) 石井秀宗 2012「推薦入試の経年分析－志願者の動向及び学業成績の検討－」『大学入試研究ジャーナル』，22，35-42.
- (18) 松崎正晃・園田直子 2019「進学動機と入試区分からみた医療系専門学生の学校適応」『久留米大学心理学研究』，18，1-9.

---

(2023年6月15日受理)